



1型糖尿病根治を目的とした羊膜上皮細胞移植臨床導入のための基盤構築

研究代表者 戸子台 和哲（東北大学大学院医学系研究科消化器外科学 助教）

研究のゴール 1型糖尿病の根治

研究の特徴

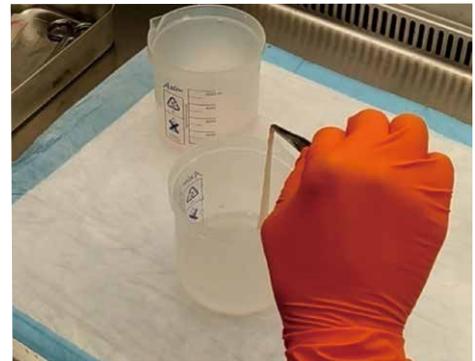
羊膜（母体の中で胎児を包む薄い膜）を形成する羊膜上皮細胞は膵臓のβ細胞へ分化できるだけでなく、拒絶反応が起こりにくい構造を持っています。通常は廃棄される胎盤から羊膜を採取できるため、膵島移植の課題であるドナー不足にも対応することができます。安全な細胞移植治療を提供できるように、質の高い羊膜上皮細胞を採取し、良好な状態で凍結保存するためのシステムを構築します。

研究概要

- （1）実際に患者さんに使用することを前提として、細胞を採取保存できるシステムを構築する。
- （2）羊膜上皮細胞を門脈（肝臓にある太い血管）内に移植した際に引き起こされる早期炎症反応の特性を解析し、移植時に使用する薬剤の最適な組み合わせを検証する。
- （3）門脈内に移植した羊膜上皮細胞がどの程度インスリンを作ることができるかを検証し、大動物を用いた解析への基盤を構築する。

これまでの研究結果・成果

移植した細胞が正常に機能することを生着といいます。細胞移植の共通課題である生着（移植された細胞が正常に機能すること）について解析を行い、移植の際に補体第5因子と呼ばれるタンパク質を阻害して早期炎症反応を抑制することで、膵島の生着を促進し得ることを明らかにしました。羊膜上皮細胞の生着向上について解析を進めていきます。



分離した羊膜上皮細胞

現在の状況

現在、70例以上のヒト羊膜から細胞分離・保存を行い、インスリン産生細胞への分化培養、さらには小動物への細胞移植を開始しており、各種解析を精力的に進めております。

この研究で患者の生活や他の研究にどのような波及効果があるか(期待されるか)

本研究により羊膜上皮細胞移植の有用性を明らかにし、臨床応用に繋げることで、1型糖尿病に対する安全で負担の小さい細胞治療法を確立することができると考えております。羊膜上皮細胞は通常廃棄される胎盤から十分な量を採取できるため、ドナー不足の影響を受けることなく、多くの患者様に提供することができるものと考えております。

患者・家族、寄付者へのメッセージ

羊膜上皮細胞は、膵細胞への分化が示されていることに加えて、拒絶反応が起こりにくい特性を持ち、腫瘍化も見られないことから安全性が高いことも知られており、1型糖尿病に対する治療法として多くの可能性を秘めた細胞であると考えております。患者様に安全で効果的な治療法としてお届けできるよう、スピード感を持って研究を進めて参ります。

ロードマップ

現在の進捗率
約10%



1型糖尿病に対する新しい細胞移植治療の確立

● 戸子台 和哲 先生プロフィール 【①座右の銘 ②趣味 ③特技 ④尊敬する人 ⑤好きな食べ物】

- ①意志あるところに道は開ける ②子どもと遊ぶこと ③立ったままで仮眠がとれること ④Bo-Göran Ericzon教授(留学先の上司) ⑤春巻き